

教育学部らしさを意識した初年次セミナー：
キャリア教育の視点からのカリキュラム開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 奈未, 坂口, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008944

教育学部らしさを意識した初年次セミナー

キャリア教育の視点からのカリキュラム開発

高野 奈未*・坂口 京子*

The First Annual Seminar Emphasizing the Department of Education;

Curriculum Development from the Viewpoint of the Career Education

Nami Takano, Kyoko Sakaguchi

キーワード： 教育学部らしさ キャリア教育 アカデミックライティング インタビュー作文

はじめに

国語教育講座・書文化専攻では、平成25年度「『教育学部らしさ』を意識した『新入生セミナー』の教材開発—国語科からの発信—」に取り組んできた(杉崎哲子・中村ともえ)。現行の国語科学習指導要領の3領域1事項を意識した教材開発を行う中で、特に表現力の伸長に留意し、学生間での他己紹介やインタビュー、プレゼンテーションに力を入れてきた。

平成26年度は以上の方針を引き継ぎつつ、新たにキャリア教育の視点からカリキュラム開発に取り組んだ(教育実践総合センタープロジェクト：公募型)。以下、①課題図書による書評レポート作成、②「聞き書き」によるインタビュー作文について、その実際を報告する。

1. 授業の概要

1. 1 「教育」・「国語教師への視座」を観点とした課題図書による書評レポート作成

(1) 実践の概要

近年、大学におけるレポート・論文作成といったいわゆるアカデミックライティングに関する指導の必要性が高まっており、諸大学で様々な方法が模索、提案されている。本授業では、そうしたアカデミックライティング指導を、学生の具体的な進路を想定したキャリア教育の観点のもとに選定した課題図書に関する書評レポート作成を通して実践していくこととした。授業の計画にあたっては、『アカデミックスキルズ第二版—大学生のための知的技法入門』（慶応義塾大学出版会 2012）を参照し、学生用テキストに指定した。

実践の主な課題とその目的は以下の通りである。

- ①書評レポート作成を通して、クリティカルリーディング・アカデミックライティングの方法を身につけ、大学における学びの基礎を作る。
- ②課題図書を読むことを通じて、キャリアに関わる新たな知見を得て、キャリア形成について主体的に考える契機とする。
- ③読書発表会を通じて、プレゼンテーション・ディスカッション能力を高める。

課題図書は「教育」「国語教師への視座」を観点とし、具体的なテーマとして、ア：子ども、イ：教育、

ウ：ことばに関する以下の図書を選定した。

ア：子ども 灰谷健次郎『兎の眼』（角川書店 1998）・河合隼雄『子どもの宇宙』（岩波書店 1987）・岡本夏木『幼児期』（岩波書店 2005）・永井均『〈子ども〉のための哲学』（講談社 1996）

イ：教育 波多野誼余夫・稲垣佳世代『知的好奇心』（中央公論新社 1973）・大村はま『教えるということ』（筑摩書房 1996）

ウ：ことば 池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店 1984）・石川九楊『書く一言葉・文字・書—』（中央公論新社 2009）

書評レポートは、これら課題図書の内容を正確に読解したうえで、それを自らの経験や知識に基づいて再検証し、新たな問いを立て、論理的に意見を述べるものである。

(2) 実践の具体

具体的な指導過程は次の通りである。

(4月・5月)

第1回 ガイダンス

第2回 レポートの書き方①

第3回 レポートの書き方②

第4回 レポートの書き方③

第5回 読書発表会

(7・8月) 書評レポートの作成・提出

①レポートの書き方

アカデミックライティングの方法の習得を第一の目的としつつ、大学での学びに必要な不可欠な力を身につけられるよう計画した。

第2回では、大学での学びの本質とは何か、テキストの解説を通して問題提起を行った。本質的な学びには、主体的な問いを持つこと、他者の意見を尊重したうえでそれを検証することが欠かせず、剽窃はそうした本質的な学びを根底から阻害する態度であることを具体例をあげて説明した。

第3回では、アカデミックライティングにおけるルール、文章の構成の方法を学んだ。そのうちパラグラフライティングについて、大阪大学全学教育推進機構が作成したワークを利用し¹⁾、以下の活動を行った。

1) 核となる単語を中心において連想する単語をあげていく。 2) 1) で書いた単語について、第1文に

キーセンテンスを置いたパラグラフライティングを行う。この活動により、技術としてのパラグラフライティングを習得するだけでなく、抽象度を調節して思考・表現する態度²を身につけさせることを企図した。課題提出後、教員がループリックにより評価を示し、コメントを付して返却、個人で振り返りができるようにした。

第4回では、引用の方法と注の付け方を指導した。初めに正しい方法を説明し、次に教員が作成した同じ内容の文例2種のうち、引用・注の方法に誤りがある文例Aを配り、具体的な誤りをグループで討議しながら見出させ、発表させた。その後、見本としての文例Bを配布、解説した。授業の後半では、ある文章を指定し、リード文ののちにその文章を引用し、引用を踏まえて自分の意見を書く活動を行った。本課題についても、第3回と同じくループリックによる評価、コメントを付して返却した。また、レポートの書き方のまとめとして、文章表現やレポートの構成に関する参考文献・調査のための基本文献を示したレポートの書き方の参考文献リスト、レポート提出前にチェックすべき項目を示したチェックリスト、書評レポートの採点基準を示したループリックを配布した。

②読書発表会

第1回のガイダンスで、教員が定めたグループ毎に課題図書を割り当てた。同じ本を読んできたグループ内で、筆者の主張の中心・重要だと思われる記述・賛同したい記述・疑問を持った点・さらに論証が必要と思われる点をグループ全員に発表させた。他者の考えに触れ、自身の固有の経験について相対的に捉え直す機会を持ってもらいたいと考えたためである。また、グループ構成員の話聞き、それを踏まえて発言するという、国語教育の柱である「聞くこと」「話すこと」の基本ルールを経験的に学ぶことも目指した。その後、グループでの話し合いを経て、本を読んでいるグループ外の学生に向け、課題図書の梗概と意義、課題についてグループ発表を行った。本活動も聞き手を想定して、発表内容を検討することの必要性を実感するためのものである。

③書評レポートの作成

読書発表会でグループおよび教室全体で意見を共有したことで、より明確になった個人の意見をレポートの書き方に則って書評レポートに作成した。

(3) 実践のまとめ

書評レポートには、課題図書を正確に読み込んだうえで新たに自分の問いを立て、意見を論理的に述べられているものがある一方、本の梗概を追ったに過ぎないものもあった。特に抽象的な概念や、比喩の多い図書を理解し難い様子が見られた。そうした図書を読み、自らの意見を組み立て、表現していく力は、経験によって培われるものでもある。その経験を積む際、本

授業で学習し、テキスト・プリントに記載される本の読み方、アカデミックライティングの方法・ルール、レポートの評価基準・チェックリストなどを繰り返し参照することで、より豊かな学びが可能になる。その得られた読解力・表現力は、課題図書の読解を契機に考え始めた自己に対する認識やキャリア形成について、主体的に考え続けるための基盤となるはずである。

1. 2 「聞き書き」によるインタビュー作文

(1) 実践の概要

学習の目的は以下のとおりである。

- ①インタビュー作文を通して「話すこと・聞くこと」「書くこと」の基本技能を伸長する。
- ②社会人の方へのインタビューを行う、その記録を「インタビュー作文集」としてまとめることを通して、キャリア形成についての意識を高める。

インタビューにあたっての課題は次の3点とした。

- ①社会人として十年以上一つの仕事に打ち込んでこられた方に、仕事の内容や心意気をお聞きする。
- ②現在の生き方を選ぶことになったきっかけや、人生の転機となった出来事について聞かせていただく。
- ③「なに」をしていらっしゃるのか、「なぜ」その職業を選んだのか、「なぜ」そのことにこだわっていらっしゃるのか、「なに」と「なぜ」を中心に、その方の思いに迫る。

教育・保育といった職種を限定せず、ある程度幅のある課題とした。教師を目指して入学してきた学生たちだからこそ、もう一度「なぜ」教師を目指すのか、教師になって「なに」をしたいのかを自分自身に問うてほしいと同時に、別の職業を選び、志をもって仕事に取り組んでいらっしゃる方々に出会い、その思いをうかがう必要があると考えたからである。

手紙あるいは電話でインタビューの趣旨をお伝えして承諾を得る。期日を決め、インタビューを行う。文章化したら一度原稿をお見せして内容の了解を得る。一つ一つの段階を経験する過程で、必ずや何らかの気づき、何らかの思いが得られるはずである。そしてその気づきや思いをもって、大学生活をスタートしてもらいたいという願いがあった。

(2) 実践の具体

具体的な指導過程は以下のとおりである。

(6月・7月)

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 第1回 | インタビュー学習の意義と方法 |
| | 第1回インタビュー(学生相互)準備 |
| 第2回 | 第1回インタビュー |
| 第3回 | 第1回インタビュー作文の交流 |
| | 第2回インタビュー(青木崇人先生への代表者によるインタビュー)準備 |
| 第4回 | 第2回インタビュー |
| 第5回 | 第2回インタビューの原稿交流 |

第3回インタビュー（社会人の方へのインタビュー）準備

- （8・9月）インタビュー活動（夏季休業中）
- （10月）原稿の推敲・印刷
- （12月）表紙・目次の作成、製本

①インタビュー学習の意義と方法

第1回の授業で、学習の意義と方法について講義した。広島大学大学院教授田中宏幸氏が前勤務校（ノートルダム清心女子大学）で行った『聞き書き集』から実際の作品例を配布した³。モデルを提示することにより学習の見通しをもたせ、意欲づけを図った。

②学生の相互インタビュー

学生間でペアをつくらせ、相互インタビューを行った。「いま熱中していること」「これまで継続してきたこと」のいずれかをテーマとし、朝日新聞の「ひと」欄をモデルとして文章化する。

留意したのは、次の点である。イ）質問したことへの回答に対して応答や再質問をして内容を深める。ロ）「ひと」欄の文章形式（概要・現在→過去→今後・別情報）を参考にして文章化する。ハ）会話を引用する、数字や固有名詞を使用する等を工夫する。ニ）まとめた作文を互いに交流する。

③代表者によるインタビュー

本年度教職大学院に在籍していらっしゃる青木崇人先生にご協力をいただき、代表者による模擬インタビューを行った。青木先生は本学教育学部国語教育専攻の卒業生であり、学生たちにとっては直接の先輩にあたる。教職11年目、沼津市内の小学校・中学校の各現場を経験されていらっしゃる。

- 事前にグループで練った質問案は次の通りである。
- イ） どうして教員になろうと思われたのですか
 - ロ） 教師としてのやりがいは何ですか
 - ハ） 印象に残っていること、児童・生徒について教えてください
 - ニ） ストレスがたまったときはどのように解消されていますか
 - ホ） 子どもたちにぜひとも教えたいことは何ですか
 - ヘ） どんな大学生活を送っていらっしゃいましたか
 - ト） 教師に必要な資質は何だと思われますか
 - チ） 先生が目指されている教育方針は何ですか

学生たちが教職・教員というものにどういう意識を持っているかが垣間見られる内容である。この質問案を骨子として、さらにどのような質問をするかを事前に検討した。なお各グループ内では、以下の仕事を分担して担当している（インタビュー、内容をメモしての文章化、推敲しての活字化）。

青木先生はインタビューの中で「一番のやりがい」は「僕のことなんか忘れて、教えたことを活かして、その子が社会で生きてくれていること」と話された。「子どもたちの喧嘩」は「チャンス」であり、「どうすれば

よかったの」ということを「教えるよりも考えさせなきゃいけない」のだとし、人間形成のチャンスだと思おうと話された。

学生たちは真剣に、かなりの緊張感をもって臨んでいた。多くのことを学び取ろうとする姿勢は大いに評価できる。課題は、先生のお話を受けての次の質問が今一つだったことである。そこを聞けば深められるのにというところで聞けない。青木先生は一つ一つの質問に丁寧にお答えくださり、時にユーモアを交えて、またかなりの部分を本音でお答えくださった。課題となったインタビュー技能や態度に対しても、適宜アドバイスをくださった。

④インタビューの実施から製本まで

模擬インタビューを総括した後、夏季休業中を利用して実際のインタビューを実施した。各自で4000～6000字程度の文章化とその推敲・印刷までを行う。

表紙や目次の作成、製本は、編集委員6名が担当した。自主的に集まったメンバーは時間を調整しながら取り組み、作文集『「人」新入生セミナーインタビュー作文』が完成した。

（3）実践のまとめ

①取材対象

学生39名が取材した業種・職種は、下表のとおりである。

業 種 職 種 別	教育	小・中・高の先生	16
		塾・習い事・予備校の先生	10
		保育	1
		飲食	2
		服飾	1
		スポーツ	2
		建築建設	2
		運輸	1
		製造	3
		サービス	1

教育・保育を合計すると27名、全体の7割に近い。その中で恩師にあたる方にインタビューした学生は21名であった。小・中・高等学校時代の担任や部活動の先生、書道やピアノ・バレエといった習い事の先生、塾や予備校でお世話になった先生方である。その他の業種・職種の方々も、何らかの関係性のある皆様にインタビューをお願いしている。アルバイト先の上司や遠縁の親戚、叔父叔母や父親といった方々である。

約9割が家族・親族以外への取材であった。関係性を起点としつつも、そこから新たな関係を拓き、社会的視野を広げる取り組みとなっている。

題目に「我が師—尊敬する先生の言葉—」「書道に人生を捧げる—書道一筋、六十年—」「教えるとは—塾という視点から—」「自ら選んだ道—特別支援学級に勤めて—」「直せる喜び—自動車整備士として—」「日本—を目指して—老人福祉施設の経営とスポーツ

クラブの運営―「環境に携わること―トンネルの空調設計を通して―」等がある。

②「インタビューを終えて」「あとがき」の記述から

「インタビューを終えて」の記述には、これまでの認識を新たにしたいという内容が多く、この学習が学生たちにとって貴重な経験になったことがうかがえる。以下3名を紹介する。

今回、小学生の頃お世話になった先生から話を聞くことができた。インタビューということで僕から質問をいくつか考えていったが、実際に話しているうちに聞きたいこと知りたいことがどんどんあふれ出てきた。(引用者略)／内容としては、教師を続けていくうちに考え方はどんどん変わっていくものなのだなと感じた。特に、先生が結果を重視していた昔とは違って、今は過程を重視しているという話はとても印象深かった。この先自分が教師を目指す上で、また教師になってからでも自分のためになるような、そんな話を聞くことができた。インタビューをするという課題を出されて本当に良かったと思う。

〇〇さんはインストラクターという誰かに何かを伝えることのできる仕事に誇りを持っており、そしてそれに全力を注いでいた。学校の教師、先生とは少し違うけれども、本質的に同じようなものがあるのだなと感じました。／教えるという仕事を少し変わった角度から見ることができ、また、有り難い話もたくさん聞けてとても有意義な時間を過ごすことができました。自分のこれまでの人生をふと振り返ってみると、自分が思っていた以上に誰かに何かを伝えられながら過ごしてきたんだなと思うと同時に、それらがみんな自分にとっての先生なんだな、と思いました。

〇〇さんとお会いするのは今回が初めてでした。(引用者略)自分の親が教師であるため、会社勤めの方の実情や勤務スタイルをうかがうのも初めてで、聞いていて新鮮なことばかりでした。今回このインタビューをすることで自分の将来にとってまた違う視野が見えたように思います。今まで具体的な目標もなくただ漠然と生きてきた自分は社会に出る前の大学4年間の重要性を学んだ気がします。

以下に挙げたのは、編集委員の一人(K・S)が記した「あとがき」である。学習の経験がどのようなものであったか、真摯に振り返っている。やや長いが抜粋

して記しておく。

・・何から何まで全部自分でしなければならぬからだ。インタビューに答えてくださる方々への電話、アポの取り方、質問の内容またそれをうまく広げていくための切り口・・・。(引用者略)ただ自分たちが言われた通りにやるのではなく、自分達が自主的に行動を起こす必要に迫られる。なぜ戸惑ったのだろうか。それは中学の時には先生や親といった保護者が当たり前のようにやってくれていたことだったからだ。

できているつもりでも出来ていない。このまま何も考えずに大学生活を過ごせば、今までやってくれることが当たり前にしただけでいなくなったことを自分たちでまともにできないまま社会に出てしまうのではないかな。そんな状態で社会に出て通用するのだろうか。そんなことを考えているうちに漠然と思った。／すなわち、もう社会人までに時間が無いということ、である。高校の時にはまったく考えもしなかったことだった。高校から大学に入ったことでその距離は急激に近づいたように感じる。(引用者略)／そんな自分たちにとって十年以上社会人として働いている方々の思いが詰まっているこのインタビューは、貴重な資料となるはずだ。教員をされている方だけではなく、さまざまな職種の方々にも協力してもらっている。教員を目指す人が多いであろうこの教育学部では学校の先生はもちろんのこと、他の職種の方々のお話をうかがうのは案外貴重なことになるかもしれない。例えば、ある同じことをする時にも異なる考え方をもっているのかもしれないし、どこの社会にも通じる考え方もあるかもしれない。様々な職種の方々に協力してもらっていることで一つのインタビューが何重にも深く感じることもできる。

そして、これらのインタビューに協力してくださった方々はこのことが社会を知る一歩となり、より社会を深く知るための手段やつながりとなって欲しいと思ってこのインタビューを受けてくださったはずだ。だからこそ、その思いを受け取ることはこのインタビュー作文の意義ではなく、義務だと考える。

2 今後の課題

一つはカリキュラムのさらなる改善である。特にインタビュー作文集をどう活かすかという点を工夫したい。もう一つ、以上の学習と他授業との接続・関連である。国語教育あるいはキャリア教育の各科目において、適切な接続・関連が図られることは、アカデミックスキルの系統的指導という点からも重要である。

のためのガイドブック』(ひつじ書房 2008)は、「パワーライティング」としてこの重要性を強調する。

³『聞き書き集・第8集 迷インタビューアー』ノートルダム清心女子大学田中宏幸+2003年度「日本語表現法」受講者

¹ 大阪大学全学教育推進機構『「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」ライティング指導教員マニュアル』(2014)ワークシート (<http://hdl.handle.net/11094/27594>)。

² 佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひと